信毎俳壇

今井 聖選

洗ひ髪乾かぬままに去年今年　（箕輪町）松沢 陸

除雪車の往き来恋人探すかに　（長野市）武田 芳子

薄味の嫁の雑煮を三日食べ　（佐久市）西田 和彦

雪掘つて玄関前に辿りつく　（中野市）増田きみ江

寒き蔵に父が閉ぢ込め祖母が出す　（伊那市）中村 彦子

双六や行くも戻るも意に添はず　（飯綱町）小林 紀子

期限過ぎ清張返す初電車　（佐久市）真山 邦弘

初夢のさめて媼にもどりけり　（須坂市）丸山 英子

着ぶくれてバックパックの羽交ひ締め　（松本市）伊藤 和夫

まだ齢九十八の年の暮　（長野市）三田村義夫

佳作

塩鮭の塩の甘みを好みたる　（箕輪町）向山 政俊

半日で仕上がるほどの年賀状　（長野市）宮沢 朝子

選評

一句目、「洗ひ髪」という古い夏の季語を、現実の習慣に更新させて用い、それによって去年今年の「瞬間」も明解に示している。二句目、災害とも言える大雪時の除雪車の往来を恋人探しに例えるその意気や良しと言うべき。三句目、作者は必ずしも嫁の味を是としていないふうも感じられる。そこが独特で秀抜。四句目、雪国はまさにこういう感じであろう。同情を禁じ得ない。

神野 紗希選

一月の練歯磨に薄荷の香　（長野市）荻原 宏祐

初電車「stay」を守る盲導犬　（長野市）福沢 ナナ

スキー場天ぷら蕎麦の列長し　（長野市）宮沢 信博

雪雲の重き軋みやひもすがら　（飯田市）大石 昭重

病癒へ富士正面に蒲団干す　（岡谷市）吉池富貴勇

冬麗の空一枚やガザ遠し　（飯綱町）小林 紀子

眠るのが怖くて雪を掻きにけり　（塩尻市）神戸 千寛

着ぐるみの口に懐炉を差し入れす　（東京都練馬区）ヒマラヤで平謝り

寒月の兎青しと信濃の子　（小諸市）加藤 陽介

ハイウェイの光の帯や除夜の鐘　（箕輪町）向山 政俊

佳作

暁や狐駆けゆく雪野原　（佐久市）篠原 文男

恵方とはわが前を行く通学路　（長野市）小日向栄子

選評

一句目、目の覚める薄荷の香が、年の初めをきりりと爽やかに。無造作な把握に繊細な季節感覚が光る。二句目、忠実に寄り添う盲導犬に正月の清らかさを見た。三句目、スキー場のにぎわしさを具体的な一場面で切り取る。天ぷらのうれしさが高揚のアクセントに。四句目、自然の運行をずしりと俳句に変換した。「重き軋み」の言葉の質量。五句目、日常の象徴の蒲団を堂々と富士へ。どうかお健やかに。

坊城 俊樹選

あふぐラガーうつむくラガーノーサイド　（上田市）竹内 重美

裸木に頬寄せて耳寄せて抱く　（飯綱町）小林 紀子

滝凍てて龍神様の深眠り　（上田市）竹内 創造

廃校の雪庇落下の音響く　（長野市）宮沢 信博

少年の赤き褌初太鼓　（千曲市）滝沢 武子

火の山の山裾借りて大焚火　（箕輪町）向山 政俊

寒晴や幣緩やかに揺れゐたり　（飯田市）大石 昭重

日記帳読み返しては年惜しむ　（下諏訪町）木口 碧

輪飾りや藁の匂ひも共にかけ　（長野市）北沢 時江

雑煮甘し母の煮たるを思ふとき　（安曇野市）丸山 進也

佳作

村々を抱き信濃の山眠る　（伊那市）中村 初治

冬麗の日ざし余さず使ひ切り　（小諸市）清水 順子

選評

一句目、ノーサイドはラグビーの試合が終わったこと。審判が高らかに笛を吹く。その瞬間チームの選手たちは天を仰ぎ、あるいは悔しさにうつむく。その光景を見事に捉えた詩情あふれる句。二句目、全ての葉を落した真冬の木。その眞摯な姿に思わず抱きしめた。裸木は何をささやいたのであろうか。三句目、滝というものを神の化身とした。凍てて動かぬ滝を龍神の眠りと例えた作者の感性は見事。